

オープン カレッジ

最近、企業の経営者や幹部候補者で、「大学で学びたい」と発言する方が増えており、なかでも哲学や宗教、文学などを学びたい分野としてあげられることが多くなっている。これらの分野は、一般的には「教養」と呼ばれている。「経営者に教養を」という取り組みの老舗ともいえる「東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム」では、リベラルアーツを学ぶことで、自ら課題を発見する資質を醸成することをうたっている。

経営に必要な「教養」とは

な世界観を持つことは、経営者にとって大切なのは間違いない。そして、日本の経営者には「教養」が不足しているという言説も良く見られるのは確かである。このことについて反論する気はない。だが、だから経営者はリベラルアーツ教育を受けるべきだと短絡的に結びつくわけではない。リベラルアーツは、そもそも目的意識とは切り離して教育されるべきもので、エグゼクティブのための短期間の講座で提供しても、価値は限られている。

うな意義を持つているのかまで、遡って考えたことがあるだろうか。人は計画を立てることがなぜ可能なのか。計画は、実行にどうつてどのような意味を持つのか。実行中偶然発見したことは計画とどうの関係にあるのか。これらを考えることで、初めて戦略計画を経営者としてどのように立てるべきかについての定見を持つことができる。

経営に必要な「教養」とは、ビジネスの方向性を考えたり、組織を理解したりするための、目的志向の教養である。哲学や歴史に通じることは、企業経営に関わる上でも、人として豊かな人生を送るためにも大きな意義を持つが、いわゆるリベラルアーツ的教養と、ビジネスを理解するための教養の間にはギャップがある。経営者としての教養と、いう意味では、経営とリベラルアーツの間をつなぐ作業が必要になる。

だが、いわゆる「ファスト教養」では、残念ながら、哲学と企業の戦略と結びつけて掘り下げて考える機会がない。教養とは、雑談力を高める道具などでも決してなく、経営を考える上で、問題を掘り下げ、あるいは創造的に解決策を考えていく力そのものである。時間の限られた経営者にとって、意義のある教養教育とは、経営者候補のグループで、ヨーロッパの詩学などを学ぶことではない。「ファスト教養」としてお手軽に哲学や歴史、文学を学ぶのではなく、経営に領域を限定して掘り下げて考え、学ぶことで初めて手に入れるべき「教養」である。経営を

経営学を

深掘りする意義

哲学や歴史、文学、自然科学などをはじめとする諸学に接して、社会を理解し、課題を発見する力や、大



桐山泰生 大学大学院経済学博士
桐山泰生 大学大学院経済学博士

すぎちま・やすお イノベーション経営、国際経営論、新規事業創造。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士(経済学)。

例えは、企業の中期計画のような戦略計画を考えるとき、人や組織にとって計画とは、そもそもどのよ

経営に教養は必要か。私の答えは「もちろん必要」である。だが、「経営学を

通して」学ぶ教養を、経営幹部候補者にはお薦めしたい。